

博士学位申請論文

論文概要書

カント、フィヒテに依拠した「力動的自我論」
の研究

尾崎 賛美

早稲田大学審査学位論文（博士）の要旨

(1) 本研究の課題

本博士学位申請論文は、近代ドイツの哲学者であるイマヌエル・カント（1724-1804）、ならびにヨハン・ゴットリープ・フィヒテ（1762-1814）に依拠した、「自我 das Ich 論」研究である。「自我」の本質を探究する研究の多くにおいてそうであるように、本研究における中心的な問いもまた、「自我とは何か」である。このような問いを掲げ、本研究は一貫して〈意識の働き〉という観点に定位し、「自我」概念の内実を考察する。こうした、いわば〈力動的な構造〉から「自我」について考察する一連の取り組みを、筆者は〈力動的自我論〉と称す。

もちろん、カントとフィヒテとにおいては、「自我」概念の位置づけや役割、意義は大きく異なる。それゆえ、本研究においても、「自我」という哲学的テーマを中心に、カントの思想とフィヒテの思想とを、単純に接合するつもりはない。また、「自我」概念をめぐる両思想の哲学的な比較考察も、部分的にこそ行うが、これも本研究が主題とするところではない。本研究が試みるのは、〈力動的な構造〉という観点から、カントとフィヒテとにおいて論じられる「自我」概念の内実を検討し、その都度に得られた重要な考察を紡ぎ合わせつつ、「自我とは何か」という問いに対する、ひとつの説明モデルを構築することである。

本研究が依拠するカントおよびフィヒテの思想に則すかぎり、「自我」を形而上学的な実体的靈魂のごとく想定することはできないし、筆者も「自我」を、いかなる意味においても、実体的な対象として解釈することはしない。また、周知のとおり、カントやフィヒテの思想を特徴づける「超越論哲学 Transzendentalphilosophie」において、「自我」とは経験的な意識一般の可能性を説明するための、いわば超越論的な概念として位置づけられており、経験的に同定され得る個別具体的な対象を指示するものでもない。しかし、筆者としては、こうした点を認めてもなお、「自我」は経験的な意識現象から完全に切り離された次元においてのみ取り扱われるような、抽象的な概念に尽きるものではないと解釈する。私見では、経験的な意識現象を説明する概念が、当の意識現象とまったく無関係な哲学的人工物にすぎないのだとすれば、こうした抽象的な概念に依拠する考察は、難解な思弁を空転させるにことに終始しかねない。それはまた、「自我」の本性の探求において、哲学が果たし得る寄与に疑念を呼び起こすかもしれない。

これに対し筆者は、超越論哲学という文脈においてさえ、「自我」は〈ある種の実在性〉を指示する概念として論じられ得ると解釈する。もちろん、「自我」概念は、経験的な諸対象のごとく見出されるわけではない。むしろ「自我」は、こうした諸対象についての経験的な意識を根拠づける側で機能する。その意味では、「自我」は経験的な諸対象と同等の実在性をそなえるわけではない。しかし、経験的な諸対象のごとく意識に現れないということは、「自我」が抽象的な概念にすぎないという帰結を即座に帰結するのではない。上述の〈実在性〉は、「自我」が〈意識の働き〉として実働する局面を具に観察するとき、たしかに見出される。それは、超越論的な次元で論じられる「自我」概念の内実を、自我論を遂行する筆

者自身の意識の働きにおいて再構成するなかで捉えられる〈実在性〉である。このように、〈力動的な構造〉という観点から「自我」概念の内実を考察することを通じて、超越論的な「自我」論もまた、けっして抽象的な議論に留まるものではなく、「自我」という実在的な意識現象と密接に関わることが明らかになるであろう。以上の問題意識から、筆者は次のような問いを、すなわち、〈超越論的で純粋な主観性は、経験的で具体的な主観性に対し、いかなる関係にあるのか〉という問いを、本研究全体を貫く主題として位置づける。

（２）本研究の方法

上述した主題を掲げ、本研究は、一方では、経験的な意識一般の説明原理として機能する「超越論的自我（超越論的自己意識）」の立場に、他方では、「経験的自我（経験的自己意識）」一般の立場に依拠し、一連の考察に取り組む。本研究は、こうした一見相容れないふたつの議論領域を往来しつつ、この両領域において論じられる事柄が、いかなる構造的連関を有するのかを明らかにし、この取り組みを通じてまた、「自我」概念の内実を究明する。したがって、本研究の全体的な〈枠組み〉としては、超越論哲学というカントとフィヒテとの思想に定位し、経験的な意識一般の可能性の原理として機能する「超越論的自我」ないし「純粋主観性」という観点から「自我」を論じる、いわばオーソドックスなスタイルを採る。しかし同時に、「超越論的自我」と「経験的自我」との連関構造を捉えるべく、本研究を遂行する筆者自身としては以下の〈態度〉を徹底する。すなわち、超越論的文脈で示される「自我」概念の内実を、まさに当の考察に従事する筆者の内面で生じる、現実的な意識の働きにおいて捉えなおし、これが経験的自我の成立において、いかなる仕方で関与するのかということを可能なかぎり捉え、それを手掛かりに議論を展開することである。ここでは、哲学的考察を行う者の意識そのものが考察の対象であり、それに取り組む者はたんに静観的な態度で言葉を紡ぐのではなく、むしろ、その哲学的考察の主体であると同時に客体として参加しなければならない。このように、一方では抽象的な議論に尽きぬよう、他方では経験的な心理学に陥らぬよう、上述の超越論的な枠組みと、現実的な意識現象への志向というふたつの主軸を整合的に論じていく上で肝要となるのが、〈力動的な構造〉において、あるいは〈力動的な事態〉として「自我」を解釈する試みである。

① カントにおける自我論

〈力動的な構造〉という観点から、カントに依拠した自我論研究を遂行するにあたり、本研究が主に依拠するのは『純粋理性批判 *Kritik der reinen Vernunft*』（1781/ 87）である。「自我」とは何か。本研究において一貫して問われるこの問いに対し、筆者はこの概念が指す〈何か〉について、あらかじめ当たりをつけて取り組むつもりはない。先に、「自我」という概念においては、〈ある種の実在性〉が指示されるとの旨を示唆したが、この主張は議論の出発点として前提されるべきではなく、議論を経て導き出される結論でなければならない。「自我」概念の内実の究明を試みる本研究において何よりも懸念されるのは、筆者が

この概念の内実についてすでに何らかの見当をつけ、いわば論点先取のような仕方で議論を展開している、といった印象を与えることである。

この点、『純粹理性批判』ではまず、「自我」という概念から何らか形而上学的な実体を想定する道が、はっきりと閉ざされる。それどころか、「論理的な主語」や、「空虚な表象」といった表現が用いられることで、「自我」概念の指示する内実が徹底的に切り詰められる箇所すらある。経験的認識一般の可能性の条件をめぐる文脈で、「自我」概念は中心的な役割を与えられているにもかかわらず、その内実そのものが主題的に検討されることは、きわめて限定的であると言っても過言ではない。カントに即そうとするほどに、「自我」の内実について積極的に主張し得る余地が狭められていく。だからこそ、『純粹理性批判』は、本研究の出発点として依拠するに相応しいテキストでもある。もちろん、意識の働きの内に「自我」概念の内実を探究する本研究にとって、『純粹理性批判』は示唆的な議論も提供してくれる。一連の議論を通じて明らかになるのは、その内実において〈もっとも乏しい表象〉にまで追い詰められながらも、〈力動的な構造〉という観点から捉えなおされるとき、「自我」概念は、もっとも〈広範な実在性〉となることである。さらに、このような実在性を規定する働き（自己規定作用）という観点からあらためて考察を行うことで、カントにおける「自我」概念の輪郭が、より具体的に浮かび上がる。

② フィヒテにおける自我論

フィヒテの思想（知識学 *Wissenschaftslehre*）における「自我」概念を考察するにあたり、本研究では主に、『全知識学の基礎 *Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre*』（1794/ 95）をはじめ、いわゆる「イエナ期」（1792-99 年）のテキストを参照する。先述の通り、カントの自我論とフィヒテの自我論とを融合させることは、本研究の本意ではない。あくまでも、〈力動的な観点〉から「自我」の内実を論じるにあたり、本研究において必要不可欠となる〈構造〉を得ることが目的である。それは、理論的自己規定と実践的自己規定とが、相互規定的な関係において形成する〈円環構造〉であり、本研究は最終的に、〈力動的な円環構造〉という観点から「自我」の内実を究明する。私見では、「自我」概念の指示する〈実在性〉は、こうした円環構造を形成する自我の実働においてのみ、あるいはこうした実働としてのみ論じられ得る。このような観点から論じるにあたり、イエナ期のテキストは示唆に富むテキストである。

〈力動的な構造〉という観点から「自我」概念の内実を追求する本研究においては、こうした、「非我」との相互規定的な連関を構成要素として成立する、〈現実的な意識における自我〉、あるいは〈現実的な意識一般としての自我〉、および、このような構造をもって成立する〈自我〉の成立事情の考察がまずもって重要となる。こうした〈自我〉は、「非我」とのいっさいの連関から完全に閉ざされた超越論的な主観性、ないし、〈無限なる自我〉として位置づけられる「絶対我 *das absolute Ich*」から峻別される。それに対し、本研究が着眼す

る〈自我〉はどこまでも、〈有限なる自我〉である。無論、〈有限なる自我〉に着目するからといって、「自我」を中心にフィヒテが展開する「超越論的な議論」の重要性を軽視したり、経験的な意識の次元へと還元するつもりはない。このような着眼点を採用するのはむしろ、経験的な意識の可能性を説明するところの超越論的な議論が、いかにして〈有限なる自我〉の成立に関与するのかという構造的な切り口から、フィヒテにおける自我論を考察することが、本研究が掲げる主題と密接に関連するからであり、このような考察を通じて「自我」概念の内実を考究することを本研究が目指しているからである。

(3) 本研究の論証手順

① 第一部：カントにおける自我論

第1章ではまず、カントにおける「自己意識」概念の考察から着手し、次の点を論証する。すなわち、カントにおける「自己意識」とは、自らへと反省的に注意を向ける事態ではなく、むしろ、あらゆる経験的な意識一般を可能にするその働きを通じて、「私は存在する Ich bin」という「存在意識」、あるいは「存在感情」を前反省的かつ、非明示的に生ぜしめるところの〈意識作用〉に他ならないという点である。この「存在意識」は、「自己意識」を司る(実体的な)主体の存在を前提するものではなく、むしろ「私は考える Ich denke」という働きが実働することではじめて、あるいは、この実働そのものとして生じる。

第2章からは、「自我」概念について、自らの存在を産出する働きという側面と、この存在を規定する働きという側面との二方向から、その輪郭をより具体的に彫刻していく。本章で中心的に論じるのは次のことである。すなわち、「私は考える」という意識作用は、(先述の「自己意識」に対し)反省的で明示的な「自己認識」という事態の成立に際しては、当の働きを通じて生じた「存在意識」を規定するところの、〈自己規定作用〉としても機能するという点である。一連の議論を通じて最終的に、経験的で理論的な「自己認識」とは、「私は存在する」という意識を反省し、それを〈自我ならざるもの(経験的な所与一般)〉との関連において規定する事態であることを明らかにする。

ここで重要なのは、自らの存在意識を規定する「自己認識」の事態は、理論的文脈にのみ限定されるものではなく、実践的文脈においても論じられる余地があるという点である。後者について本稿は、第3章で、「道徳法則」の意識との関連から自らの存在を規定する、実践的「自己認識」という事態として論じる。こちらの「自己認識」にかんしてはカント自身、ほとんど具体的な記述を残していない。しかし、私見では、こうしたテキスト上の事実が、実践的「自己認識」の検討の可能性までも否定するわけではない。そこで本章では、この実践的自己認識という事態を中心に、理論的文脈と実践的文脈とのテキストを整合的に精査し、ひとつの可能的な解釈を提示する。

とはいえ、このように理論的文脈と実践的文脈とで「自己認識」論を展開することにより、これら両文脈における「自己認識」がはたして互いに無関係な事態として成立しているのか、

あるいは、何かしらの連関を有しているのか、また、仮に有するのだとすれば、それはいかなる連関であるのか、という疑問が浮上する。筆者の見解をあらかじめ示しておけば、両者は相互に連関しており、さらに言えば、〈一方を欠いては他方もない〉という意味において両者は〈相互規定的な連関構造〉を形成している。残念ながら、カントのテキストに即してこの〈連関構造〉を論証するには限界があり、積極的に主張できることは多くない。それゆえ、こうした〈連関構造〉について、より具体的に検討していくために、ここからはフィヒテの思想に定位した考察に移行する。

② 第二部：フィヒテにおける自我論

第4章ではフィヒテの思想に依拠し、理論的自己規定も実践的自己規定も、互いに他方を欠けばいずれも成立不可能となる、という意味での〈相互規定的な連関構造〉を主題化する。こうした連関構造において、〈現実的な意識における自我〉は成立する。本章では〈現実的な意識における自我〉の成立事情、およびその成立に際し、上の〈連関構造〉がもつ重要性を明らかにする。なお、ここで考察される自我は、知識学の中心的な原理である「絶対我」から明確に区別される。一連の議論を通じて明示されるが、〈現実的な意識における自我〉について考察を深めるほどに、その内実は「絶対我」から乖離したものとして顕わになり、両者のあいだには、同じ「自我」という術語が用いられているとは思えないほどに架橋不可能な深淵が存するように思われる。それに伴いまた、「絶対我」という概念も、結局のところ、〈現実的な意識における自我〉とは無関係な、空虚な哲学的人工物かのごとき印象を与える。

こうした点を念頭に、続く第5章では、とりわけ『全知識学の基礎』で論じられる「障害 Anstoß」概念を検討する。この概念が知識学において果たす役割を見定めることにより、つねに非我との相互規定的な関係に条件づけられた、有限な、〈現実的な意識における自我〉が、その成立において、無条件的で、無限な「絶対我」といかなる仕方で連関するのかという点を明らかにする。本章では、「障害」概念と「絶対我」とが、理論と実践とのそれぞれ文脈において、〈現実的な意識における自我〉の成立を説明する上で想定されなければならない概念であることを示す。一連の議論から、「絶対我」という概念が、〈現実的な意識における自我〉、あるいは経験的意識一般の説明原理として機能するという点において、けっして空虚な概念に尽きるものではないことも明らかになる。

第二部の残る1章で筆者は、ここまで超越論的な概念として論じられた「絶対我」概念について、あえて〈意識現象〉という観点から光を当て検討を行う。それは、本研究を遂行する筆者自身の〈態度〉ともかかわる重要なところだからである。これまでの研究では、知識学（とりわけ『全知識学の基礎』）の第一原理である「絶対我」は、その原理としての機能を果たすがゆえに、「フィクション」として解釈されることがあった。すると、知識学も経験の可能性の条件を説明する〈フィクショナル〉な思想体系となるのか。フィヒテ自身が自

らの体系を特徴づける表現のひとつでもある、「実在的思考の体系」という概念に着目する立場の論者は、こうした見立てに真っ向から反論する。はたして知識学は、このような相容れない側面を、いかに整合的に保持しつつ成立し得るのか。第 6 章では、知識学の「精神 Geist」を理解する上で重要となる「知的直観 *intellektuelle Anschauung*」という哲学的実践を手掛かりに、知識学という「超越論的な議論」において、「現象学的な議論」がもつ重要性を明らかにする。

③ 第三部：カントの自我論とフィヒテの自我論

再三言及したように、カントの自我論とフィヒテの自我論とを比較考察し、両者を接合することは、本研究が本意とするところではない。それでも、この第三部では、それぞれの主観性の理論に取り組んできた筆者なりの角度から、両者の自我論の関係に光を当てる。思うに、カントの自我論とフィヒテの自我論との関係は、〈近いようで遠く、遠いようで近い〉のである。こうした印象は、フィヒテの表現を用いれば、彼らの思想において用いられる「字句 Buchstabe」と、彼らが自らの思想に取り組む「精神」との関係に由来しているかもしれない。

そこで、第 7 章では「自己定立 *Selbstsetzung*」という術語に着目する。この術語は、とりわけフィヒテの思想において中心的な役割をそなえるが、カントが晩年の数年間に書き溜めた草稿群、いわゆる『オプス・ポストウムム』において散見されるようになる。年代的に見れば、こうした徴表を、フィヒテからカントへの思想上の影響の証左として捉えたくもなるが、同時期の書簡からも示唆されるように、この時期のカントとフィヒテとの関係はむしろ冷え込んでいた。本章では、この時期のカントとフィヒテとの関係について書簡等の分析から検討しつつ、晩年にまで及んでカントが新たに使用するに至った「自己定立」という術語について考察する。一連の考察を通じて、「自己定立」という術語には、批判期に展開されたカント自身の自己意識論、および自己認識論と接続させ解釈することではじめて明らかになる意義があること、それとともにまた、カントの自我論は、たとえフィヒテと共通の術語が用いられていたとしても、(少なくともカントからすれば) どこまでもフィヒテの自我論からは遠く隔たっていることを示す。

第 8 章では、カントの自己意識論とフィヒテの自己定立論とを突き合わせるかたちで、両者の自我論の関係を考察する。それに際しては、カントとフィヒテとにおいて、その位置づけがほとんど真逆といっても過言ではない「知的直観」概念にも着目し、彼らの自我論が「字句」の上でどれほど隔たっているかを示す。もちろん「自我」という概念が登場する背景が異なる彼らのあいだでは、その内実の開示のされ方にも大きな違いはある。しかし、こうした明白な差異があるにもかかわらず、カントの自己意識論とフィヒテの自己定立論とをつぶさに見比べていくと、こうした差異は、両思想家が「自我」を、静止的には捉えられ得ることのない、動的な事象という観点から論じた結果であることが示される。我々は自我をど

のようにして捉えるのか。両思想家から得られる答えは、我々はけっして自我そのものを捉えることはできないということである。しかしそれは、「自我」を論じる試みの挫折を意味するのではなく、むしろ「自我」のそなえる本質を顕示する。第8章では最終的に力動的な事態として「自我」を論じるという姿勢こそ、術語の使用上の表面的な〈遠さ〉にもかかわらず、「自我」という極めて捉えがたい事象を扱うに際し、カント、フィヒテともに持ち合わせていた鋭敏な精神の〈近さ〉であることを論じる。